

風に告げよ
上

陳舜臣

講談社

陳舜臣 大正十三年、神戸に生まれる。

昭和三十六年、「枯草の根」で第七回江戸川乱歩賞、昭和四十三年、「青玉獅子香炉」で第六十回直木賞、昭和四十五年、「孔雀の道」玉嶺よふたび」で第二十三回日本推理作家協会賞、昭和五十一年、「敦煌の道」で第三回大佛次郎賞を受ける。

中国の歴史に材をとった作品として、「阿片戦争」「北京悠々館」「閩の金魚」「秘本三國志」「中国任侠伝」「新西遊記」「中国近代史ノート」など多くあり、この作品の主人公・鄭成功の父、鄭芝龍を描いた「風よ雲よ」も近く本社より刊行の予定。

旋風に告げよ 上 一二〇〇円

著者 陳舜臣

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二―二一
〒一一二 振替 東京八一三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一二(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



第一刷発行 昭和五十二年十月十六日
第二刷発行 昭和五十三年二月十日

©陳舜臣 昭和五十二年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

旋風に告げよ 上 目次

闇に呼ぶ名

月琴

さらば金陵

南征の道

追われる者

改名

美しい島

無塵庵

聖駕進まず

仙霞嶺

悲報

230 214 192 172 155 127 114 86 60 28 7

南の夢

愚かな争い

琉球通信

風の如し

海島仲秋

■主要登場人物一覧

■関係地図(表紙裏)

5 328 297 284 268 244

カバー絵 装幀 山内 暲
「閑却された台湾」

(Coyett, Fredrik; Verwaerloosde Formosa, 1675.)
所載の鄭・蘭交戦の図及び鄭・蘭交渉の図を使用。

旋風に告げよ
上

■主要登場人物一覧（上巻）■

鄭成功 父・芝竜と日本人妻・多喜とのあいだに長崎に生まれる。幼名・福松。七歳で福建に帰り、森と改名。学生時代には、大木、という字をもっていた。国姓爺ともいう。
鄭芝竜 長崎では顔思齊という海商団の首領の下におり、その後継者。福建に一大勢力をはり、中国南半部に鄭王国をつくることを夢とし、清朝と明朝に二股をかける。
陳衷紀 顔思齊海商団の有力幹部。
統太郎 顔思齊の息子、お蘭の異母弟。改名して統雲。鄭成功の懐刀となる。
お蘭 父・顔思齊の死に疑問をもっている。切支丹で身の危険を感じ日本を脱出、大陸と台湾を往復、巫女に身をやって動きまわる。中国名・顔金蘭。
吉井多聞 医師。お蘭と行動をとともにする。
鄭鴻達 成功の叔父、芝竜の弟。鄭家水軍の総兵（師団長）。別名・芝鳳。
鄭彩 成功の従兄。隆武帝（聿鍵）軍の副元帥。
鄭聯 成功の従兄。鄭彩と兄弟。成功の指導権に強く反対。
福王 由松という。明朝が南京に移つてからの皇帝。即位一年余で清軍につかまり殺された。
唐王 明朝が北京を追われたのち、鄭一族の支持で福州（福建省の省都）で皇帝となり、隆武帝と名乗る。
聿鍵 隆武帝の弟。兄の唐王の称号を継承、兄なきあと紹

武帝を名乗る。即位一ヵ月十日で清軍にとらえられ自殺。
魯王 浙江省・紹興で監国（皇帝不在のとき国政をみる所謂摂政）となる。鄭彩・聯兄弟に支えられる。
桂王 名は由榔。隆武帝の死後、皇位につき永曆帝となる。鄭成功に支えられる。
順治帝 滿洲族清朝の皇帝に六歳でなる。名は福臨。
ドルゴン 順治帝の叔父で摂政王。太祖ヌルハチの第十四子。のちに順治帝の実母と結婚、皇父となる。
李自成 宿場人足から身をおこした勇将で、反乱軍を率いて北京・紫禁城に崇禎帝を攻め、自殺させ、北京の主になるが、たちまち滿洲族に追い出されてしまう。
林一祥 鄭軍の情報係。大耳、といわれる。
洪承疇 福建省出身の俊才。文官ながら軍政畑を歩いた。滿洲軍の捕虜となり、そのまま清につかえ兵部尚書（国防相）をつとめる。
甘輝 鄭家水軍の勇名高い将校。のち鄭成功軍の副官。
程鵬波 父・程青湖のあとをついで私塾で主に四書五經を教え、特に才能ある者には絵も指導。文人画家。
淑媛 鵬波の娘。統雲の妻になる。
董氏 鄭成功の本妻。姉さん女房。
張少珠 鄭成功が南京で学んでいた頃なじんだ妓楼の女。のちに成功の親友・陳方策の妻となる。
陳方策 南京の太学での鄭成功の親友。

闇に呼ぶ名

興福寺の門を出て、統太郎はたちどまった。

朱塗りの柱は、色彩のわりには清楚せいそなたたずまいである。山門の額は青地に金泥文字きんでいもじで、

——東明山

と読めた。

現在、長崎市寺町にある興福寺の山門にも、おなじ「東明山」の額がかかっているが、それは隠元和尚の筆である。

だが、この物語は寛永二十一年夏のことなのだ。この年の十二月に「正保」と改元されたが、西暦でいえば一六四四年、すなわち隠元の日本渡来の前十年にあたる。

いま統太郎が見上げた、左右にひろがり気味の、かすれた三字は、現住職もくす黙子和尚が書いたものだった。その黙子和尚が、絵画の名手として知られる逸然いつねんを、故郷の明国から招聘しょうへいして、今日、到着したのである。

「統雲とううんか。……」

統太郎はつぶやいた。

彼は絵かきになるつもりであった。

いや、自分ではもうそれになったつもりでいる。子供のころから、彼は絵をかくのが好きであった。自分が生きているこの世界を、自分の美意識にしたがつて、誰の目にもみえる絵で表現する。——こんなにすばらしい仕事があればあるだろうか？ 世の中の人間が、どうしてみんな絵師にならないのか？ 少年のころ、統太郎はふしぎでならなかった。

ことし、彼は二十二になった。一人前の絵師らしく雅号をつけたいと思い、知り合いの呉少峰ごしょうほうの紹介で、逸然和尚に命名を頼んだのである。

「本名の一字をとって、統雲とすればよろう。……統雲、これはいい名前だよ」と、逸然は言った。

たったいま日本に着いたばかりの和尚は、明国の言葉で言ったのはいうまでもない。長崎になく住んでいる唐人大工の呉少峰が、それを日本語に直したのである。だが、平戸で唐人絵師から明国の言葉を習っていた統太郎は、通訳なしでも、そのていどのことは聞きとれた。

呉少峰は山門まで送りに来て、

「じゃ、またいらっしゃい。今日は和尚も、長い船旅で疲れていなさるからね」

と、愛想よく言った。

「ありがとう。和尚にはゆつくりと休んでいただくことですね。……私も明後日あたりに、またお訪ねすることにしませう」

統太郎はそう言つて、頭を下げた。

呉少峰は大雄宝殿のほうへひき返した。

統太郎はもういちど山門の額を見上げた。

彼は満足感をおぼえている。逸然和尚の口から出た言葉はすくないが、さすがに味わいの深いものがあつた。それを胸のうちに反芻しながら、彼は坂をおりて行く。まちは暮れなずんでいた。

「あつ！」

とつぜん、彼は短い声をあげた。

後頭部に激痛をかんだ記憶は、かすかにあつたが、そのあと、意識は消えた。

道のまん中に倒れた彼を、黒装束の男がさつと茂みのなかにひきずり込んだ。

長崎には唐人の寺が三つあつた。

最も古い東明山興福寺は、元和六年（一六二〇）の創建で、土地の人たちは南京寺と呼んでいる。

江蘇、江西、浙江など、いわゆる三江地方出身の人たちの寄進によつた。

つぎは分紫山福濟寺で、寛永五年（一六二八）に、漳州出身の人たちの浄財で建立され、漳州寺の名がある。

さらに翌寛永六年に、福州出身の人たちによつて聖寿山崇福寺が創建された。

三寺とも「福」の字をもつので、三福寺と呼ばれたものだった。

興福寺住職の黙子は、江西の人で、橋梁づくりの泰斗でもあつた。いまでも長崎市の中島川にかかつている「めがね橋」は、彼がつくつたものである。本来の仕事である、在留中国人の信仰や葬喪の場を主宰するほかに、彼は自分の特技を生かして、地域社会のために尽そうとした。

（橋だけではなく、日本の文化にも貢献を）

彼はそう考へて、すぐれた絵師でもあつた浙江の逸然を招いたのである。

逸然の名は、すでに日本にも知られ、どんな径路をたどつてか、彼の作品も何点か将来されていて、かなりの評判になつてゐる。

だから、到着の日に、もう弟子入り希望らしい青年が、寺の専属大工の紹介で逸然に会い、雅号をつけてもらうということになったのである。

その青年林田統太郎が、興福寺を出たあと、何者かに襲われたということは、むろん黙子や逸然の知るはずのないことだった。

どれほどだったか、統太郎は暗闇のなかで意識を取り戻した。

背のびしても手の届かないほどの高さに、小さな窓らしいものがあり、そこだけがほんのりと白い。その真四角の窓にも、格子がはめられていた。下は土間で、彼はそのうえに、まる裸でころがされていたのである。

夏だからよかったものの、これが厳寒の季節なら、凍え死んでしまったであろう。

あたりを手さぐっている、莫塵の端らしいものが手にふれた。とりあえず、そのうえにすわろうとして、莫塵に布のようなものがのっているのに気づいた。それがなであるかは、すぐにわかった。

（ああ、ふんどしか。……）

彼は苦笑した。

着物もあるかもしれないと思って、彼は四つんばいになって手さぐりながら進んだ。すぐに壁につきあたった。天井は高いけれど、ひろさはないようである。

着物はみつからなかったが、三面が漆喰の壁で、格子窓とおなじ面に、戸があることがわかった。ぶ厚そうな戸で、押せども引けども、びくともしない。

統太郎は、なにはともあれ、立ちあがってふんどしをつけた。下腹をぎゅっと締めつけると、胃がむかむかしてきた。

（誰がこんな目に遭わせやがったんだろう？ それもなんのために？ 財布には小銭しかはいって

なかったが。……)

彼はさっぱりわからなかった。

他人にうらまれるおぼえはないし、身代金のタネになるほどの大物ではない。だいいち、彼には家族らしい家族はいないのである。

(では、なぜ?)

あれこれと推測すれば、あるいは手がかりをつかめるかもしれない。しかし、彼はあまり考えたくなかった。

(どうでもいいことだ)

彼は自分に言いかけようとした。

下手に推理すれば、どんな可能性が掘り出されるかもしれない。彼はそれをおそれた。なにもかも埋めておきたいのである。知りたい気持——好奇心はないではない。が、どうせろくなことではないという気がするのだ。

自分についてのことは、彼はもうすべて目を閉じていたのだった。

統太郎は平戸藩の下級武士の林田家に生まれた。——すくなくとも十歳のときまで、彼はそう思っていた。ところが、父親が死んだ直後に、

——統太郎は林田家の血筋の者ではない。子の生まれぬ父親が、家を継がせるために、正当な手続を経ずに、他人の子を実子として引き取って育て、お上をあざむいた。

ということが、身内のあいだで問題になったのである。

相続すべき大きな財産や、魅力のある地位があったわけではない。ただ親戚筋に、あふれた次、三男をかかえている家があり、なんとかして我が子を、林田家へ押し込もうとしたのが真相であつたらしい。

実子ということにして、もらい子をするのは、裏面ではよくあったことだろう。面倒な手続も不要だし、赤ん坊のころから育てたなら、情の面でも好ましいはずだから。とはいえ、禄をはむ封建の家臣としては、それはたしかにお上をあざむくことにはちがいない。露顯すれば、林田家はとりつぶしになる。

——統太郎儀、幼少ながら信心深く、ゆくゆく仏門に入りたいと申し、その決心なかなか堅固にみえますれば……

大人たちはそんな理由をでっちあげて、統太郎を廃嫡してしまった。

親族会議のようなものが開かれたらしいが、廃嫡のことが通ったのは、統太郎が実子でない証拠なり証人があったからであろう。

結局、出家するしないは別として、彼は一応、長崎の寺に預けられることになった。

林田家にながく仕えていた老僕孫兵衛は、渡しまで見送ってくれたが、別れるとき、

——坊ちゃま、我慢なさいませ。坊ちゃまと仲好しのあの福松坊やなんぞ、言葉も通わぬ異国へ、たった一人で渡りましたぞ。そのとき福松坊やは七つだったではございませぬか。長崎はまだ日本の言葉が通じまする。

と、涙声で言った。

それ以来、統太郎は苦しいときには、福松のことを思い出すようになった。福松の名を口にすれば、ふしぎに、どんなことでも辛抱できるような気がしたのだ。

「福松よ！」

ふんどしをしめ終えて、統太郎は闇にむかつて、そっと呼んでみた。

平戸に滞在した明国の海商鄭芝竜は、下級藩士田川氏の娘をめぐって、二人の子を生んだ。長男が

福松で、次男が次郎である。

海商といえばきこえはよいが、人によつては彼らを海賊と呼ぶ。当時の商船はすべて武装していたし、海上で系列の異なる商船にあえば、一戦をまじえるのがふつうであつた。勝つたほうが、相手の積荷を捕獲するのが、海の掟だったのである。

鄭芝竜はたいへんな美男子であつた。家をとび出して海へ出たのも、父の妾に惚れられ、ことがばれて勘当されたからだという。

平戸にいたころ、彼は顔思齊がんとしせいという海商団の首領の下に属した。顔思齊が台湾で酒を飲みすぎて死んだあと、幹部であつた鄭芝竜が後継首領として、その組織の一切を相続したのである。

その後、鄭芝竜は明の朝廷から、海軍の司令官に任命された。そして、福建泉州府に基地をつくつた。こうなれば、そうかんたんに日本へ渡つて妻子に会うことはできない。そこで、彼は日本の幕府に、家族呼び寄せのことを歎願した。

幕府はどうしたわけか、七歳の福松だけに出国許可を与えた。おそらく次郎は幼少にすぎ、渡航に堪えられないと考えたからであらう。そうすれば、次郎を養育する母親も、とうぜん渡航はゆるされない。

福松は単身、唐船に乗つて、まだ見ぬ父の国へ渡つたのである。これが寛永七年（一六三〇）で、統太郎の廃嫡はその翌年の出来事であつた。

唐船の出入りが、長崎一港に限られたのは、寛永十二年からであり、福松渡航のころは、まだ平戸に唐船の姿が見られたのである。

「福松よ！」

平戸瀬戸から出て行く船に、岸壁から声をかぎりに呼んだ情景が、十数年たつても、統太郎には昨日のこのように思い出される。

おたがいの家は近かったが、仲が好かつたのは、そのためだけではない。げんに隣家に一つ年下の男の子がいたが、統太郎はその子と遊んだおぼえはない。相手はいつも福松であった。

「やっぱり仲が好いねえ」

あるとき、親戚の老婆が、二人が遊んでいるのを見てそう言った。それは仲好しをほめているのではなく、むしろとがめているように、統太郎の胸にひびいた。とくに、「やっぱり」という言葉に、異様な抑揚があつた。

のちになって、彼は「やっぱり」という言葉にひそめられた意味をさとつた。——彼の実の父親も、明国の海商だったのである。それがわかつたのは、ごく最近のことだが。

闇のなかで耳をすますと、かすかに水の流れる音がきこえる。川が近いようだった。

「福松よ！」

統太郎は、こんどはもうすこし大きな声で、その名を呼んだ。

すると、その呼びかけにこたえるかのように、一条の白い線がさつと闇の床のうえに走り、それがひろがった。

戸があいたのである。

東の空がやつと白み始めるころであつた。

おしひらかれた戸口から、およそ十人ほどの男が、わつとはいってきた。みんなふんどし一つの裸である。

何人か鉢巻をしているのがいたし、頬かむりしている男もいた。それしかおぼえていない。顔が見えるほどの明るさではなかつたし、時間的にもそんな余裕はなかつた。

「おう、かかれ！」

彼らは口ぐちにそうわめきながら、統太郎にとびかかつて来た。